

余聞 1 遠隔地伝道、島の天理教

本連載は「天理教伝道史の諸相」としながら歴史的視点ばかりでなく、地誌的視点でも述べてきた。残りの連載3回は天理教伝道を史的、地誌的に眺め、余聞として書きたい。

遠隔地伝道

明治29年末、沖縄を除く全道府県に1カ所以上の天理教教会ができていた。明治20年代の前半、近畿を除けば教会はまだ少数だった。それが明治20年代後半、またたく間に全国に伸び広がったのは遠隔地伝道によるところが大きい。

天理教伝道初期においては近隣の親類や知人がその対象だった。少し離れた地域への伝道でも1日で往復できる程度の距離だったであろう。しかし、ある時期から遠隔地へ、1日では戻って来ることができないほどの所まで出かける伝道者が出現する。明治中頃から大正にかけて日本の鉄道幹線が続々敷設され、移動の時間は短縮された。しかし、多くの人々はまだまだ徒歩であちこちに出かけていた。したがって1日で戻って来ることができるとはそんなに遠くではなかったが、出かける伝道者にとってはたとえ隣県であっても遠隔地であった。

簡単に自分の本拠地に戻れない場所を伝道地に選ぶのは、自らの生活基盤や家族を犠牲にすることである。多くの艱難があるにもかかわらず大勢の布教師が遠隔地へ向かったのは何故だろう。おそらく、ない命を助けて頂いたお礼に自分が人を助けるとの強い信仰信念を持っていたからではないか。

教祖におたすけ頂いた人はご恩返しのため人だすけをした。最初は近くに住む親類、知人においをかけたであろう。暫くするとこの教えを知らない人を求め、次第に遠方へおたすけに出る人が現れる。遠隔地伝道を試みた人の中には教祖のひながたを辿るためすすんで伝道の苦勞を味わった人がいたのではないか。

遠隔地へ伝道する人が多くなるのは明治20年代半ば以降である。山名分教会(現大教会)の布教師たちはこぞって東北伝道に出かけた。しかも現地調査のため福島県内を見て回り、東北に天理教はまだほとんど入り込んでいないことを知る。この調査結果を山名初代諸井国三郎に伝え、指示を仰いで東北へ布教師を送り込んだ。明治26年のことである。

福島に東北伝道の前線基地としての事務所を設け、その後布教師たちがより遠方へ向かう場合、中継地の役目を果たした。現地調査を行ったり事務所を設けることは、当時としては画期的な方法で山名をあげての組織的伝道といえるものであった。

北海道は伝道史において大変興味深い所である。北海道開拓のため東北、北陸をはじめ全国から入植者が来た。それと同じく天理教布教師も全国からやって来た。開拓と布教の二つの目的を持っていたり、開拓者である知人を頼って布教のため渡道した。北海道伝道に開拓は切り離せない。

現在、北海道には教会系統数が多い。全教159大教会のうち95もの大教会が北海道に教会を持っている。これは全国各地からいろんな系統の布教師が北海道伝道を目指した結果である。沖縄と共に、ちばから最も遠隔地である北海道に千に近い教会が設立されたこと、また教会の設立年代が他府県と大きな違いがないことは遠隔地伝道が盛んになされたからに他ならない。

一例を挙げると、現在北海道で最も多くの教会を有するのは洲本大教会である。膽振、統北という二つの大きな教会があるが、その始まりは共に山本初右衛門という布教師が淡路島からやって来たことによる。山本によって山本鹿蔵、山本角蔵、笹田佐蔵などの布教師が育ち、現在の発展につながった。淡路島からの遠隔地伝道によって現在の北海道内洲本系があると言っている。

また東北、北海道以外の地域へも明治20年代、30年代に積極的に遠隔地伝道が行われた。本連載のこれまでに記載してきたところであるが、おおむね近畿を除けば、遠隔地伝道によって現在の基礎が形づくられたと言っても過言ではない。

「燎原の火の如く」と言われる明治20年代の本教伸展は遠隔地伝道の賜物だった。近隣への伝道ばかりでは短期間のうちに日本全国への伸展はなし得なかった。

島の天理教

人口や面積などに対して教会の多い島がある。例えば、小豆島、屋代島(周防大島)とそれに続く忽那列島、しまなみ海道の諸島、対馬、中通島、奄美大島などである。その一方、同じような条件であるのにほとんど教会のない島もある。この違いは何だろう。自然地理の立場からは理解しがたい。人文地理的に考えても十分な答えは出てこない。

小豆島には現在、30カ所に近い教会がある。奄美大島にも24カ所ある。島は当然のことながら他の陸地から海を隔てて存在する。一般的に海は交通の妨げになる。したがって島へ宗教は入りにくいと考えるのが普通である。しかし、一旦入った宗教は島から出にくいという考えも成り立つ。

以下は私の仮説だが、陸続きではないという困難を乗り越え、伝道された島で、信仰心が熱くなると島のあちこちでおたすけ活動が盛んになる。入信した人の中で特に熱心な人はどこか遠方へ伝道しようと考えても島であるため島外へ行くことが難しく、島内でのおたすけ活動になる。その結果、島に教会が多く誕生することになったのではないか。逆に陸続きではないが故に布教師が渡らなかった島もあるだろう。そこは当然教会がない。

個々の島には別個の歴史や文化があり、島に教会が増えた理由は同じではなかろう。しかし、この仮説が多かれ少なかれ影響しているのではないかと考えている。

奄美大島は教会数24カ所のうち芦津一大島分教会系統が大半の23、対馬は7カ所全部が高知-厳原分教会系統、中通島も8カ所全てが防府-中通分教会系統である。このように教会系統が単純であることも島における天理教の特徴と言える。

なお近年、島の人口は減少気味である。教会所属の信仰者が島外へ出て行く。今までのように島内の信仰者で教会活動していたものが大きく変わってしまう状況がある。これは島だけではなく、産業、働き場所の変化に対応出来ない町が増え、信仰者の居住地が移動し、教会から遠く離れてしまうことも多い。新しい信仰者を獲得するのが理想だが、遠くに住む信仰者との繋がりをどのように維持するのかが見過ごすことの出来ない今後の大きな問題である。

(13頁へ続く)

(3頁からの続き)

人の方が生きいきとしている”などと嘆いている人がいますが、それは、切り出された用木は、まだ根のある山の木とは違うということ。用木は期待される役目を果たすために、手入れもされるし磨きもかけられる。しかし、それを嫌がり拒否していれば、やがては打ち捨てられ、根がないので朽ちてしまうことになるのです。

しかるに、一方、必ずしも全ての人がよくになるわけではありません。ですから、自分がよくになるについての承認と協力を、家族や身近な人たちから得ることが必要になるのですが、それを得ることが容易でないことも、また、「ひながた」に示されているところなのです。

(4頁からの続き)

[補] 本連載 32 「その他の地域の海外伝道」でメキシコの天理教を書いたが、以下のように若干の補正を加えたい。

名古屋メヒコ教会を設立した安藤ペレス・せつ子は絵の勉強でメキシコに渡る前、名古屋大教会で森井敏晴会長（当時）から信仰の仕込みを受けた。森井会長から絵の勉強だけでなく、おたすけにメキシコへ渡るんだと、海外伝道への熱い思いを聞かされた。それは森井会長が二代真柱から教えられたことでもあった。メキシコでの安藤は美術学習とともに布教活動に勇躍し、大勢の若者をようばくに育てた。

(5頁からの続き)

けて死んだときに、そのながした血によって洗礼されて殉教者となる血の洗礼や火の洗礼などがある。天理教では殉教者という意識がそもそも不在であるから、それに対する儀式も不在である。しかし「みかぐらうた」の「いっせんにせんでたすけゆく」（九下り目の一）を「一洗二洗で助け行く」と漢字の訓読み表現をした場合（『おかぐらのうた』上田嘉成、天理教道友社、545頁、『みかぐらうた・おふでさき』村上重良校注、13頁）は、やまとことばではなく不自然で、くわえて天理教にも洗礼儀式があるのではないかと未信者には誤解されるおそれがないとは言えないであろう。筆者の「せん」論はやまとことばの多義性に触れて幕末の貨幣論から別項でおこなう。

(7頁からの続き)

くない。留学経験者と配偶者は、天理移民同様、ブラジルの天理教の「日系人化」を維持させる要因になったとみられる。また、同じ世代にはブラジルに移住して会長になっている日本人が7人おり、彼らも「日系人化」を強化しているともいえる。

しかし、その一方で、子弟世代は日本で「ブラジル人」アイデンティティを強く意識するようになっている。学生生徒講習会は子弟世代が企画しており、ブラジル人の感覚に合うように進められ、関心を高めている。このようにブラジルの天理教では「非日系人化」への模索が始まっている。

(10頁からの続き)

またもや行進中にストップ

7月27日午後7時、シチリアのパレルモで、カルメロ派の聖母マリア像の行進が、ポンティチェッロ通りの葬儀屋の前で、中年男の「生まれ」の一声でストップ。その葬儀屋というのは

マフィアのボスの経営だ。そのボスは捕らえられていて、北のノバラの刑務所に1年半も収容されているのだが、彼、アレッサンドロ・ダンブロージョは今40歳だ。

同じような事件があつてからまだ1カ月も経っていない。それは7月2日、イタリア半島の南のレッジョ・カラブリア州のオピード・マメルティーナで、自宅監禁の罪に問われている「ンドランゲータ」のボスの家の前で「恩寵の聖母マリア像」が、行進中にストップして、「お辞儀」をしたというものだ。その後、その時のマリア像の担ぎ手の25人が調査によって、7月9日に明らかにされた。その25人の中の一人は、「我々は『ドラングエータ』の二つの異なったグループに属し、神輿の前後に分かれている。しかし対立関係にあるのではなく皆友達だ」と語っている。

1800年代より「信仰会」と言う名目の小集団がシチリアではたくさん結成されていて、その実態はなかなか把握されないうでいた。例えば、このアレッサンドロ・ダンブロージョはカルメロ山の聖母マリア信仰会の信仰深き尊厳者と見られていた。地元の検事フランチェスコ・メッシオネは「この出来事は、この地区の日常生活に暗い影を落とした不幸な出来事である」と言及した。残念ながらマフィアのサブカルチャーは未だ生き残っているのだ。警察や陸軍警察の告発、逮捕そして内部告発にもかかわらず、事件のあったパレルモのパラロー界限では、40代のダンブロージョは、若者の間では神話的人物である。それは甥のフェイスブックへの次のような投稿でも読み取れる。「彼は我々全員の誇りである。」「彼は唯一者であり、特別者である。」この一連の出来事に、地区の神父ヴィンチェンツォは「不意の停止だった」「今年もまた起きてしまった」と呟いていた。枢機卿パオロ・ロメオはその行進のために代表団を送っていたし、ヴィンチェンツォ神父は「信仰会」のリストを要求されていた。事件のあった当日は枢機卿より特使も送られていたのだ。マフィアたちはこの「信仰会」を隠れ蓑にするのか、聖母マリア像の行進に非常に熱心だし、毎年復活祭前の聖金曜日の重大な聖行進を企画するのだ。これらの出来事はヴァチカンに苛立たせている。ヴァチカンの仲介は厳しさを増し、マフィアの介入を防ぐために「信仰会」の解散を求めている。

比較思想学会でパネル発表

金子 昭

比較思想学会第41回大会が7月20日、島根県松江市の中村元記念館で開催された。8本の個人研究発表、パネルディスカッション及びシンポジウムが行われた。私はパネルディスカッション「思想としての生命 第1回『出生と生命』」の部にパネリストとして発題した。パネリストとそのテーマは次の通り（発題順）。田中かの子・駒澤大学講師「いのちの『ありのまま』を引き受ける、という原則からの一考察」、安藤泰至・鳥取大学准教授「この世に生まれてくること—生命操作の時代のなかで—」、金子昭「人間的生命の出生をめぐる哲学的人間学の試み—」。コーディネータは沖永宜司・帝京大学教授がつとめた。